

あの蝶は、
僕を置いて

ビト

登場人物

迷子 女 男
お巡りさん

男と女がいる。

男はキラキラした目で、女は思いつめた目で、立っているか、座っているかする。
女の胸には、蝶のブローチ。
どうやらここは屋外で、今は夜のようだ。

男
アサギマダラって蝶がいるんだよ。

女
うん。

男
遠く遠く、海を渡つていく蝶なんだ。

女
そう。

男
もちろん知ってるよね？

女
え？

男
え、知らない？ 前も話したと思うけど。

女
あー、そういうえば聞いたかも。

男
しつかりしてよ、もう。

女
ごめんごめん。

男
それじゃもう一回、頭から説明するね。アサギマダラは、

女
大丈夫大丈夫！

男
本当に？

女
うん、多分日記に書いてあるから、寝る前に、そう、寝る前に確認するから、その蝶
の話は置いといで。

男
どこにさ。

女
話の置き所くらい自分で考えてよ。

男
それじゃあここに。よし！

女
そこに置くんだ。

男
それで話つてなに？

女
え？

男
え？

女
あ、ああ話ね、そうだね、あたしから言つたんだもんね。

男
そうだよ、うつかりさんめ。

女
初めて言われたよ、うつかりさん、つて。

男 そう？ よかつたね、初めての言葉に触れて。

女 そうだね、あたしはうつかりさんだ、本当に、そう。

男 で、そのうつかりさんは、なにをうつかりしたんだい？

女 まあ、そのさ。

男 うん。

女 あたし達もう、二十八になるよね？

男 ああ、そうだね。正確には、来月の八日に君が二十八になる。そしたら僕らはおそろい、二十八と二十八のカップルだ、へへ。

女 いや、まあそなんだけど、今は正確さは重要じやないの。

男 正確さよりも大切なものがあるかな？

女 あると思うよ。って、また脱線しようとする！

男 ああごめんごめん。なんか癖でさ、人の話の腰を折っちゃうんだよね。ボキリ！ って。

女 悪い癖だよ、滅茶苦茶悪い癖。

男 無意識で、つい、ね。

女 なおたちが悪い。

男 でもその分、仕事は丁寧にやるんだ。人一倍丁寧に丁寧に。ひたすら、パンの生地を無心にこねるように。

女 今のは仕事は？

男 カウンセラー。

女 やめたほうがいいって！ 絶対！

男 天職だとと思うんだけどな。

女 むしろあんたを雇い続ける病院の気が知れない。

男 でも院長先生には期待、いや、評価されてるんだよ？ 君は本当におしゃべりだね、患者さんよりもずっと、つて。

女 それを褒められてると思うの？

男 思うもなにも褒められてるんだって。この間だつて、君はこんなところで燻つてるような人間じゃない！ 知り合いの病院に行かないかい？ 話は通しておくから、だから、ね？ ね！ なんて凄い剣幕で言われちゃつてさ、はは。まあ、今の病院居心地いいから断つたけどね。

女 可哀そうな院長先生。

男 あ、蝶だ！

女 え？

蝶は飛んでいない。

女 いないけど。

男 いないよ。

女 え？

男 え？

女 え？

男 嘘です。

女 え？

男 嘘だよ、はは。だいたい蝶は、夜には飛びません。

女 なんで嘘ついたの？

男 抜き打ちテストさ。僕の話をちゃんと覚えているかな、ってね。

女 あのさ。

男 残念！ 赤点だ。これから開く補講に、ちゃんと参加するように！ 家、寄つてくれ
しょ？ そこでみつちりと話すよ。幸い明日はお互い休みだし、朝まで話しても問題
は、

女 そういうところが！

男の声 あのお！

迷子、慌ててやつてくる。

男・女 え？

迷子 ゴ存じありませんか？

男 なにを？

迷子 私のこと、ゴ存じありませんか？

女 知りません。

迷子 それでは、ここに私が落ちてはいませんでしたか？

女 え？

迷子 それか、この空を私が飛んでいたりはしませんでしたか？

男 あなたに翼があるようには見えないから、空を飛ぶのはちょっと難しいんじゃないかな。

迷子 そうですね、確かに。では、空を飛んで逃げた可能性は低いか。
女 ちょっととちょっと。

男 なに？

迷子 ああ、失礼しました。驚かせてしまったようで。
男 確かに驚きました、はは。

迷子 そりやあ驚きますよね、こんな夜更けに突然、見ず知らずの男に話しかけられた
ら。女性だったらまたちょっと違う反応が返ってきたのかもしれません、どうやら私は
身も心も男のようとして。こればっかりはどうも。

女 いや、女人だったとしても。

迷子 ああ、でもどうか、その驚きと恐れを他所へうつちやつて、助けてくれませんか、
私を！

女 ええ、いやえつと。

男 なにかあつたんですか？

女 ちょっと！

迷子 聞いて下さい！ 私はどうやら記憶喪失のようなんです。

男・女 記憶喪失？

迷子 ええ、そうなんです。

男 記憶喪失の人が、自分のことを記憶喪失なんて言いますかね？

迷子 だつて実際そうなんですもん。

女 あの、そこをまっすぐ行つたら交番がありますから、そっちで、ね？

迷子 いや、そうなんですよ！ お巡りさんに聞けばいい、私も最初はそう思っていたんですけど、なんだか足がその、うまく前に進まないと言うか。交番と逆のほうにはキビキビ動くんんですけどね、不思議なことに。

女 へ、へえそらなんですかあ。あのさ。

男 なに？

女 多分相當不味いことになりそらだから、うまく追い払つてよ。

男 あなたどつか行つてください。

女 ストレートに言うな！

迷子 なんでそんな残酷なこと言うんですか！ あなた達はあれですか、雨の中、猫なのに濡れネズミになつた震える捨て猫に、そつと傘をさしてやるくらいの優しさも持ち合わせていないんですか！

男 僕猫嫌いなんで。それじゃ。

女 あ、うん。

迷子 待つて待つて待つて待つて！

男 なんですか？

迷子 分かりました、例えが悪かつたんですね？ だからあなた達は冷たいんですよね？ だつたら謝ります、ごめんなさい。どうか助けて下さい、本当に困つてるんです。

男 いや、でも彼女が。

女 え？

迷子 なんですか？

男 追い払つてつて、

女 助けましよう！

男 え？

迷子 本当ですか？

女 ええ助けますとも、助けようじやありませんか！

迷子 やつたあ！

男 いいの？

女 （男を叩く）

男 いたつ。なになになに？

女 それで、どこから忘れてるんですか？

迷子 はい、最初からです！

女 あの、具体的に。

迷子 ですから、最初からですよ。

男 生まれた時から？

迷子 そうかもしません。現に今、私は自分の両親の顔も、両親から貰つたであろう、自分の名前のことも思い出せません。

男 でも親から教えて貰つたであろう日本語は話せていますよね？

迷子 あ、確かに。

男 よかつたですね。言葉も忘れちゃつてたら、もっと大変なことになつてたと思いますよ。言葉が通じない人間に対して世間は冷たいですから。

迷子 ああ、よかつた。一安心。

男・迷子 はははは。

女 よ、よかつたよかつた。で、問題はひとつ解決ですね？

迷子 いや、実際の問題はなにも解決してませんよ。ただ現状の確認が出来ただけで。

女 でも、ふたつとまでは言いませんが、ひとつくらいは解決しましたね？

迷子 まあ、そうですね。ちょっとした安心は手に入つたかも。

女 ならよかつた！ 頑張つて下さいね、これからも。

迷子 え？

女 それじや失礼します。ほら！

男 え？

迷子 ちよつとちよつとちよつとちよつと！

女 あたし達に出来ることは全部やりました、最善を尽くしました、だからもうあとは公務員の管轄です、具体的に言えばお巡りさん。

迷子 それが怖いからあなた達に助けて貰いたいんですよ！

女 ああもう！ お巡りさんが怖いってことは、なにか後ろ暗いことがあるんでしょ！ そんな人の面倒なんて、……あ。

迷子 ……。

女 えつと、その。

迷子 私は、やっぱり罪深い人間なんでしょうか。こんなに、お巡りさんを怖がるなんて、やっぱりおかしい気が、

男 太郎！

女・迷子 え？

男 名前を忘れたんでしょう？ それなら代わりの名前があつた方がいい。で、どうでしょ

う、太郎さん？

迷子 太郎つて、私が？

男 そうそう。

迷子 う、うーん。

男 いやですか？

迷子 いや、悪いってことはないんですけど、もつとこう、個性的な名前がいいかなあ、って。

女 仮の名前なんだから、そこはあんまりこだわらなくていいんじゃないや。

迷子 いやでも、折角だから。それにほら！ もし私の本当の名前が太郎だったとしたら、気まずくありません？

女 誰に？

男 バタフライ！ 蝶って書いて、読みがバタフライ！ どうですか！

女・迷子 太郎で。

男 なんですか。カツコよくて綺麗で、夢がある名前でしょ？ ねえ？

女 そういうの後で苦労するから、つけられた方が。

男 そんなにいや？ 子供ができたら、この名前にしようつて決めてたのに。

女 奥さんの意見をちゃんと聞いた方がいいね。

男 だから今聞いてるんだけど。

女 え？

男 え？

迷子 あの。

男 はい？

迷子 私の名前が、太郎って決まったわけですが、どうしましよう？

男 どうしようつて？

迷子 なにかいい方法ありませんか？

男 なにかある？

女 え？ ああ、うん。持ち物の確認するとか？

男 なるほどそれだ。で、なにを持つてますか？

迷子 ちょっとお待ちを……、あ！

男 なにがありましたか？

迷子 ふふふふふ、デン！（スマホを取り出す）

男・女 おおおおお！

男 これはもう、ほとんど解決ですね。その中にはあなたの個人情報の全てが詰まってる

でしょうから。

女 それは言い過ぎかもしないけど、まあ手掛かりはありますね、きっと。

迷子 ふう、自分の強運が怖い！ 人間万事塞翁が馬、悪いことがあればいいことがあ
る。世の中ってやつはよくできるなあ。

男 ほら、確認しましよう！ ここまでくるとこっちもワクワクするなあ。ほら、一緒に
見ようよ、感動の瞬間を。

女 あたしは、いい。一人で見て。

男 そう？

迷子 さあさあ、なにが出るかな、なにが出るかな？

ワクワクの間からの、沈黙。

女 どうでした？

迷子 知つてますか？

男 知りないです。

迷子 知つてますか？

女 なにを？

迷子 パスワード。

女 知つてるわけないでしょ。

迷子 え、つと。

男 思い出せます？

迷子 もっと大切なことも思い出せないので、スマホのパスワードなんて思い出せるわけ
ないでしょ！

男 急に怒らないで下さいよ。

迷子 ああどうするんだ。開けなくちゃ、こんなただの光るかまぼこ板だよ。

男 どうしましようね。

女 太郎さん。

迷子 なんですか？

女 交番は、あっちにありますよね。

迷子 そう、みたいですね。

女 なら、あっちじゃなく、そっちに、ひたすら歩いていったらどうですか？

迷子 え？

女 そしたらなにか思い出すかも。ほら、同じ場所を何度も歩き回ってたら、アイディアが出たり、忘れものを思い出したりするでしょ？ ね？

男 そうかな？

女 ほら！ 彼もそう言つてる！

迷子 は、はあ。

女 なにを隠そ？ 彼は、この町に数多ある病院の中でも、一番大きなメンタルクリニツクでカウンセラーを務めているのです！

迷子 おお！

男 数多つて言つても一軒しかないけどね。

迷子 涙いですね！ 人は見かけによりませんね！

男 いやあ、照れちゃうなあ。

女 そんな彼の言つことに間違があるでしょ？ いいえ！ ありません！

迷子 確かに！ お医者さんが嘘を言つはずない！

男 いや僕は医者じゃなくて、

女 でしょ？ だからこはひとつ、彼の言つことを信じて、そつちに、来たほうに歩いていきましょう。そうすれば見つかりますよ、太郎さんの記憶のカケラが！

迷子 はい！ それでは！

男 元気だなあ。

女 いつてらっしゃい！

迷子 いつてきます！

迷子、自分が来た方に走り去る。

男 別に走る必要ないのに、変なの。ね？ はは。

女 行こ。

男 え？

女 あの人帰つてくる前に。

男 いやいや、意地悪しちゃ悪いよ。

女 あの人は赤の他人だよ。わざわざ待つ義理はないでしょ。

男 でも、あっちに行け、って言つたのは僕らでしょ？ あ、そつちに行け、か、はは。

まあそう言つたのは僕らなんだし、待つてあげようよ。

女 あのさ。

男 なに？

女 なんでここに呼んだと思う？

男 あの人を？

女 あんただよ！

男 どうしたの？

女 あんたをここに呼んだのはあたしだ！

男 そ、そうだね、うん。

女 だから、あたしがなんで、あんたをここに呼んだのか、その理由が分かんないのかつて。

男 ええ、なんだろう。誕生日でもないし、二周年記念でもないし、なに？

女 ちよつとは自分でも考えてよ。あたし、馬鹿みたいじやん。あんたはなにも考えてないのに、あたしだけ、自分の中のよく分かんないどこまでも付き纏う影みたいな気持ちに振り回されて、グルグル目え回して、そんなに頭良くないのに、色々考えでき。ほんとあたし、馬鹿みたいじやん。いや、馬鹿なんだけどさ、どこに出しても恥ずかしくない馬鹿なんだけどさ。馬鹿って分かつてんのにそれ以上馬鹿だと思わせないでよ、傷つくんだよ、あたしだつて人並みに。

男 馬鹿じやないよ、君は馬鹿じやない。

女 そんな言葉が聞きたい訳じやないんだつて。

男 でも君は馬鹿じやないのに、自分のことを馬鹿だ馬鹿だつて卑下して、心に針を刺して血を流してる。そんな君に僕は、カウンセラーとしても、君の恋人としても、馬鹿じやないよ、としか言えない。

女 だからだよ！

男 君は馬鹿じやない！

女 あんたはあたしを見もせずに、あたしの心だけを見た気になつて、勝手にはしゃいでる。それがイラつく、ムカつくんだよ！

男 落ち着いてよ、言つてること無茶苦茶だよ？

女 無茶苦茶はあんたでしょ？ 彼女が、電話でもラインでもなく、直接会つて話そつて言つてるんだよ。デートでもなく、話すことだけを目的にして。

男 そうだね、うん。

女 なにかあると思うでしょ？ 思わないの？

男 いや、なにか大切な話があるのかな、とは思うけど。

女 そう、大切な話があるんだよ。そこは分かつてくれるんだね、ありがとう。

男 でも君は匂わせるだけで、ちつとも本心をあかしてくれないじやない。これじゃ分か るものも分かんないよ。

女 察して欲しい、っていうのはそんなにおかしなこと？

男 おかしいよ。どんな気持ちも、言葉や行動にしなくちゃほとんど伝わらない。雰囲気 だけじゃ不十分だよ。

女 ああ、そう、そうなんだね。……、それなら言葉にするよ。

男 是非お願ひ。なんでも聞くからね。

女 ……、あたし、

迷子、凄い勢いと剣幕で帰つてくる。

迷子 ひい、ひい、ひいつ。

男 お帰りなさい。

迷子 ちよ、ちよっと置つて下さい。

男 太郎さん？

迷子 さ、さつき、自転車で走つてたんです。

男 誰が？

迷子 お巡りさんが！

男 ほお。最近のお巡りさんは仕事熱心だなあ。

迷子 だからなんとか、ここはしのぎたいんです。

男 それならそこら辺に。

迷子 は、はい。

男 あ！

迷子 な、なんです？

男 そちら辺に僕の話を置いてるんで、気を付けて下さいね。

迷子 なんの話ですか？

男 蝶の話ですよ、そこに蝶の話を置いたんです。

迷子 そ、そうですか。じゃあ踏まないよう気を付けますね。

男 はい。

迷子 それじやあ。

自転車のベルが聞こえる。

迷子 私を売つたりしないで下さいね。（隠れる）

男 そんな冷たいことしませんよ。僕は手が冷たいから、心は温かいんです。ね？

女、男にビンタする。

男 え？

女 あんたの心は、冷たいよ。

声 痴話喧嘩中すいませーん。

お巡りさんが徒歩でやつてくる。

お巡りさん ちょっとお話いいですか？

男 え、はあ、その。

お巡りさん どうしたんです？

男 ちょっと、びっくりしちゃつて。

女 お巡りさん。

お巡りさん はい、なんですか？

女 察しの悪い男の罪は、誰がさばきますか？

男・お巡りさん は？

女 あたしはこいつを裁きの台にのせたいんです。

お巡りさん くうー、若いなあ。私にもそんな時があったよ。ああ、今でも思い出す、中二の秋。好きなあの子のリコードをべろべろ舐めた、あの時の味。

男 よく警察になれましたね。
お巡りさん 勉強は出来たからね。

女 それで、どうなんですか。

お巡りさん 残念ながら、出来ません！ 誰もこの罪な男性を裁くことは出来ない。民事

不介入だし、なにより、人の恋路に首を突っ込んだら、馬に蹴られて死んじやうから。

ははは。

女 ですよね、知つてました。

お巡りさん 大丈夫。失恋は、優しい時の流れが癒してくれますよ。

男 失恋したの？

女 誰が？

男 君。

女 ……。

男 なんてね。そんなことにはならないよ、僕は君が大好きだから。蝶と同じくらい君が大好きだ。あの空を飛ぶ宝石と同じくらい、君は軽やかで、繊細で、美しい。

お巡りさん かあー、よくそんな甘つたるいことが言えるね。酔つてんの？

男 僕下戸なんです。

お巡りさん あ、そうなの。残念だったね、君は人生の半分を損してる。

男 その半分を知ろうとしなければ、幸せなまま死ねますね、はは。

お巡りさん この幸せ者め。

男・お巡りさん ははははは。

女 それでなんですか。

お巡りさん え？

女 あたし達、そんなに怪しく見えましたか？

お巡りさん いやいやそんなに。安心して下さい。君らはどこにでもいる、ありふれた力ツブルだよ。そこにいちやもんつけるほど、私は野暮じやない。

男 だつたらなんで？

お巡りさん いや、最近物騒でね。この辺りで出たんだよ、あれが。

男 あれ？

お巡りさん そう、あれ。

男 お化けですか？

お巡りさん お化けだつたらよかつたねえ。お化けだつたら手錠かけられないから、警察

としては仕事しなくてすむし、気が楽なんだけど。ただ今回の相手は、手錠をかけられるやつなんだ。

男 露出狂とかですか？ 君はどう思う？

女 …。

お巡りさん 外れ。もつと怖いやつ。

男 なんだろう、税務署かな。

お巡りさん 通り魔だよ。

男・女 え？

お巡りさん 通り魔だよ。もう三人殺して、五人に深い傷を負わせてる。

女 あれって、別の町だったんじや。

お巡りさん そう！ そななだよ。私もそう思つてた。どうせ他所の町でしょ？ こつちにや関係ないない、対岸の火事だ、あつはつは、つて。でもどうやら、今は、この町に来てるらしい。きっと野良犬みたいに、グルグル唸りながら放浪してるんじやないかって。あくまで噂だけね。あー、畜生！ いつだつて犯罪者はこっちの仕事を増やしやがる！ ま、それで飯食てるんだけどさ、恼ましいねえ。

女 その話、本当ですか？

お巡りさん 言つたでしょ、あくまで噂だつて。ただその噂に、小さいけど、根も葉もあるらしい。少なくともうちのお偉いさんは、それが限りなく事実に近い、噂だと信じてゐみたい。

男 物騒ですねえ。

お巡りさん 君ねえ、ちよつとは驚いたり怯えたりしてよ、彼女を見習つて。面白くないなあ。

男 いやあ、実感の伴わないニュースつて、へー、としか言えなくありませんか？

お巡りさん まあ、確かにそうかも。

女 あの、その通り魔の外見とかつて分かります？

お巡りさん ん？

女 男なのか、女なのか、とか、でつかい、とか、ちつこい、とか。

お巡りさん さあ、どうだろう。とにかく怪しやつが通り魔なんじやない？

女 警察がそんな適当でいいんですか！

お巡りさん しようがないでしょ、なんにも分かつてないんだから。あ、でもひとつだけ。多分男じやないかな。

女 多分つて。

男 なにか根拠とかあるんですか？

お巡りさん 私の勘だけどね。今回の通り魔、女性しか殺していないんだ。

女 え？

お巡りさん そういうことするのって、男だけじゃない？ って私は睨んでる。どうかな
私の推理。

男 不思議な説得力がありますね。

お巡りさん でしょ？ 毎日海外ドラマを欠かさず見てるから、こういう推理力が磨かれ
ているんだよなあ。見直した？

男 初対面に見直すもなにもないでしょ、ははは。

お巡りさん それもそつか、ははは。

男・お巡りさん はははは。

女 なんで、笑ってられるの？

お巡りさん それじや、私はここら辺で。お邪魔しました。

男 いえいえ。

お巡りさん 君、ちゃんと彼女を守つてあげるんだよ？ 私は君達を、テレビ画面(+)に
見るはめになるのはごめんだからね。

男 ええ、しつかり。

お巡りさん 君も。色々彼に思うところがあるみたいだけど、今日だけは我慢した方がい
い。じゃないと命が、

女 うるさい。

お巡りさん は、はい。ごめんなさい、調子乗つてました。それじや、いらで。さよな
らあ。

男 さようなら。

お巡りさん、居心地が悪そうに去る。
チリンチリンという自転車のベルが鳴り、お巡りさんを乗せた自転車はどこかに走
っていく。

男 行きましたよ。

迷子 本当ですか？

男 もちろん。ね？

女 嘘です、まだいます、お巡りさん。

男 え？

迷子 ひえ！ 嘘つき！

男 嘘じやありませんって。なんでそんな嘘つくのさ。

女 ねえ、あたしの言うことも分からない、場の空気も分からない、分かるのはせいぜい蝶のことと、付け焼刃の心理学。そんなあんたにはなにが分かるの？ なにが分かんのよ！

男 あ、そうか。さっきのお巡りさんの話が怖かつたんだね。でも大丈夫！ 通り魔に会う可能性よりも、会わない可能性のほうがずっと高いから。それに怖いなら、僕が君のうちまで送つていくよ。それか、僕のうちに来る？ 全然問題ないから遠慮せずに、

女 ねえ、教えてよ。

男 え？

女 あんたは何回あたしの手を握った？ あんたは何回あたしのことを抱きしめた？ あんたは何回あたしにキスをした？ あんたはあたしに、愛してるって一度でも言つてくれた？

男 言つて欲しいの？ だつたら、

女 いらない！ そんな養殖の愛してる！

男 えつと、な、泣いてるの？ なにが悲しいの？

女 泣いてない！

迷子 あのお。

男 ごめん、多分僕に原因があるんじやないか、って薄々は感じるんだけど、どうしてそういう感じるままでは分からないんだ。だから、教えて欲しい。分かつてみせるから。

迷子 ちよつとー。

女 あたしはただ、分かつて欲しいの。あんたに。

男 分かるよ、言つてくれれば必ず分かる。だから言葉にしてよ。

女 ……。

男 ど、どうして黙つちゃうのさ？ お願いだよ、ただ言葉にしてくれればいいんだ、端的に、率直に言つてくれればなおいい。信じてよ。

女 あたしを信じてないあんたを、どうして信じなきやいけないの？

迷子 あのですね。

男 信じてるよ！ どうしてそんな悲しいこと言うんだ。

女 それを悲しいとは感じるのね、ちょっと嬉しい。

男 話をそらさないでよ。

女 それでない。

男 え？

女 これっぽっちもそれでないの。

迷子 嘘つき！

男 え？

迷子 もういないじゃないか、なんでこんな意地悪するんだ！

男 いや今大事な話をしてて。

迷子 私の大事を差し置いてまでする大事な話なのか！

男 はい。

迷子 そうですか、それはお邪魔してすいません。でも、私にとつても今はとても大事な話なんです。センター試験前の受験生の追い込みのように、

男 今は共通テストって言うんですよ。

迷子 あ、そうなんだ。

男 あなたの年が分かつってきた気がします。

迷子 本当ですか！

男 ええ、だからあなたの話は後にして、

迷子 ずるい！ 教えて下さいよ、ねえねえねえ。

男 いや、まずこっちの問題を！

女 南に行くの。

男・迷子 え？

沈黙。

女 うん、南へ行くの。

男 沖縄？

女 ううん、もつと。

男 オーストラリア？

女 それよりは手前。

男 仕事で？

女 違う。

男 旅行で？

女 違う。

男 もう少し早く行つてよ。そうすれば僕の準備も、

女 あなたと行くんじゃないの。

男 え？

女 あなたの知らない、男の人と、二人で行くの。

迷子 それって。

女 うん、そう。

男 冗談？

女 冗談じやない。

男 ……。

女 はは、言葉にすると、本当に伝わるね。散々躊躇つたけど、最初からこうすればよかつた。

男 僕に、愛想がつきた？

女 それもある、もちろんね。

迷子 あの、えつと。

女 ごめんなさい、こんな話聞かせちやつて。

迷子 あ、いや！ こつちこそ、ごめんなさい。

男 僕が抱えてる、欠点とか、問題点とか、そういうのを解消しても、君は帰つてこない？

女 多分ね。

男 そうか、そつか。

女 言つてくれないんだね。

男 ……。

女 裏切り者つて。

男 言つて欲しいの？

女 嘘じやなかつたらね。

男 僕がそう思つてたら？

女 うん。嘘はたくさん、養殖の言葉も、もう、たくさん。

男 ……。

女 そつか。思ってくれなかつたんだね、残念。だけど、嘘をつかないでくれてありがと
う。

男 愛してる。

女 え？

男 過去形じやなく、現在形で、現在進行形で。

女 ……。

男 うん、ごめんね。言葉足らずは、君だけじやなくて、僕もそうだつたみたいだ。

女 あー、うん、そうか、そつか、そつか……。

男 君のこと、蝶と同じくらい好きだつて言つたよね。

女 そだね。ちよつと、いやかなり腹立つたけど。

男 あれは間違い。僕は、君よりも蝶が好きだ。

女 ……。

男 でも僕は、君を蝶より、愛してる。

女 ……ありがとう。

迷子 あの、そのう。

女、ブローチを外し、男に差し出す。
沈黙。

迷子 待つたあ！

男がそれを受取ろうとするのを、迷子が止める。

女 なにするんですか！

迷子 やめたほうがいいやめたほうがいいやめたほうがいい。

男 なにを？

迷子 後悔しますって絶対！

女 しないようにこうしてるので、邪魔しないで！

迷子 いや君達はまだまだ若い。私の年は、どうにも思い出せないけど、多分君達よりも

年上だ。年長者として助言しましょう。こういう別れ方は、絶対によくない！色々と尾を引くよ？特に君！

女 なに？

迷子 彼に黙つて他に男を作つてゐみたいだけど、その様子じや、そつちのほうにいつても、また浮氣して破局するでしよう、手に取るように分かるぞ！

女 はあ？

迷子 今ならまだ間に合う！ その新しい男に「めんなさいして、この人とより戻します。中々いよいよ？」こんなに親切で、優しくて、笑顔が素敵な人。そりやまあ、ちよつと変わつてるし空氣も読めないけど、まあそこは可愛げ、つてことで。

男 あの。

迷子 あなたもあなただ！ もつと力を込めて、

男 僕と彼女で決めたことに、意見しないで貰えますか？

迷子 でも愛してるんでしょ？

男 え？

迷子 彼女を愛しちやつてるんでしょ？

男 それはまあ。

迷子 だつたらいかなきや！ 自分の魂に素直に従うことが許されるのは、二十代までだ！

女 あんたはなにがしたいの！

迷子 恩人二人への恩返しです！

女 いらないそんなの突き返す！

迷子 その突き返しを馬鹿力で突き返します！ そりやあ！

男 ねえ。やっぱりやり直せないかな？

女 はあ？

迷子 いいぞ！

男 この人にそそのかされた訳じやないけど、「」でこんな形で君と別れちやうのは、多分後悔するかなつて。

女 やめてよ、こんな理想的な形で別れらんないよ、この場を逃したら。

男 これからなにがあつても僕らの先には、破局しか待つてない？

女 そうだと思います。

迷子 そんなことないぞ！

男 そんなことないって。

女 そんなことあるの！ こんな部外者の言葉にいちいち揺らされないで。そんなのあたしとあんたのこれまでの時間に対する侮辱だよ。

男 その侮辱を承知で、僕は君とまた一人で歩みたい！

迷子 有効！

女 うつ。

迷子 技あり！

女 太郎うるさい！（迷子を蹴つ飛ばす）

迷子 無効！

男 驎目かな。

女 驎目、だよ。だって、

男 新しい仕事探すよ。君が、カウンセラー向いてないって言うなら。

女 そういうことじや、

男 スペースを空ける。実際の部屋のスペースも、僕の中のスペースも。

女 驎目、

男 君が見つけた男とも、僕が話をつける。殴り合いになつても、殺し合いになつても、

必ず、話をつける。
女 ……。
男 だから僕と、一緒に生きて欲しい。

迷子 決まった！ 一本！ 君の一本勝ちだあ！

男 ちょっと黙つて下さい！

迷子 あ、はい、すいません。

男 返事を聞かせて、

女、男にキスをする。

迷子 きやつ、人前ですよ。

男と女、見つめ合う。その沈黙。

女 言葉にしなくても、分かる？

男 うん。

迷子 と、言うことは？

女 キスは。

男 イエスとは限らない。

迷子 え？

女 遅すぎたね。

男 うん、遅すぎた。

女 これ。（蝶のブローチを差し出す）

男 ……。

女 結構、気に入つてたんだ。だから、返すね。

男 持つててくれない？

女 駄目。見る度に、あんたを思い出しちやうから。

男 そつか、うん……。（受け取る）

迷子 こ、こんなのって。

男 太郎さん。

迷子 もう一回ちゃんと、

男 ありがとうございます。

迷子 へ？

男 あなたのお陰で、多分今夜は泣くけど、晴れやかな気持ちで、前を向けそうです。

迷子 いや、私はその。

男 今夜は一晩中つきあいますよ、記憶探し！ お巡りさん抜きでね。ちょっとしたお礼です、はは。

迷子 ああ、ありがとうございます。でも、あなたは、あなた達は。

女 あたしは、行きます。なんか、うん、へへ。

男 バイバイ。

女 うん、バイバイ。

迷子 や、やっぱり駄目ですよ！

女 もうおせつかいはいらない。これはあたし達の問題。それで、その問題は解決しまし

た。

男 ええ、答えは出ました。ちょっとほろ苦い答えが。

女 だからこの話はここまで。次は、彼があなたの記憶を探す、

迷子 そんなの知るもんか！ 許さない、許さないぞ！

男 それはあなたのエゴですよ。

迷子 目の前で恩人達の破局を見る私の気持ちをちょっとは、

迷子 ものの見事にすつころぶ。

その拍子に、懐からなにかが落ちる。

男 大丈夫ですか？

迷子 私のことはいいんです！ 今はあなた達の。ん？ これは？

迷子、落としたものを拾い上げる。

それはナイフだ。

男 なんですか、それ？

女 ひっ！

男 なに？

女 に、逃げ、逃げ。

男 どうしたの？

女 あいつ！

迷子 陸上部だったんですよ、俺。

沈黙。

迷子 小、中、高、とね。地元では負けなし、地区大会でもベストスリーには入ってた。

まあ、途中でやめちゃいましたけど。でも、その時走った足は、まだここにある。

女 そう、ですか。

男 思い出したんですか？

迷子 ええ、お陰様で。ありがとうございました、色々と。迷惑おかげしたでしょ？

男 まあ、そうですね、はは。

迷子 ははは。

女 こう、ばんに。

迷子 逃げて下さい。

女 え？

迷子 逃げて下さい。俺はどっちかっていうと、追いついて欲しい、っていうよりは、追いかけたい、ってほうなんで。はは。さあどうぞ、南になり北になり、必ず追いつきますから。

男 そこはなんとかなりませんか？

迷子 なりませんね。あ、お兄さんは行つていいですよ。

男 なんですか？

迷子 男をバラす趣味はないし、お兄さんのこと結構好きなんで。俺がバラすのは、俺をひりだしたアバズレと同じ、股のゆるい女だけだ。

女 ひっ！

男 僕に顔見られてますけど、大丈夫ですか？

迷子 はは、やっぱズれてるな。そんなこと気にしないでいいから、ほら、行つた行つた。

男 でも。

迷子 別れたんでしょ？

男 はい。

女 助けて。

迷子 だつたらこいつは、もう赤の他人だ。

男 そうなりますかね。

迷子 俺はあんたの赤の他人をバラすだけ。

男 はい。

迷子 なにか問題が？

女 お願ひ。

男 そう言わると、ありませんね。

迷子 でしょ？

男 じやあ僕は。

迷子 ええ、さようなら。

男 はい、そうですね。

迷子 ほら、逃げないんですか？ 逃げれば少しは助かる可能性があがりますよ？ 多

分、二パーセントくらい、はは。

女 やめて、ごめんなさい、謝り、ますから。

迷子 黙れアバズレ、豚のように死ね。

迷子、女を刺し殺そうとする。

男 女と迷子の間に、無意識に、あるいは反射的に割り込む。ナイフは吸い込まれるように、男に滑り込む。

女・迷子 え？

男 はは、なんでだろ？

迷子は慌ててナイフを引き抜こうとするが、男は迷子の手ごと抑え込み、それを許さない。

女・迷子 なんで？

男 いやあ、赤の他人のために赤い血流すつて、なんだか詩的じやありませんか？

迷子 離、離せ！

男 なんででしょ、それは出来ませんね。

女 どうして？

男 行つて。

女 え？

男 南へ。あ、いや、現実的には、交番かな？

女 あたしは。

男 君のことなんて知らない。これはきっと、僕がこうしたいから、こうしたんだよ。女 あ、ああ。

迷子 てめえ、逃げんじやねえぞ！ 逃げたら生きたままなます切りにしてやる！

男 はは、それは出来ません。僕、この手ははなしませんから、なにがあつても。女 あたし。

男 走つて！ ちゃんと前見てね、転ばないよう。

女、泣き叫びそうになるのを必死に、一泣きながら、交番に向かう。

迷子 逃げんな逃げんなって逃げるな！

男 逃げろって最初に言つたのあなたでしょ？

迷子 なんで、ここまでする！

男 え？

迷子 あいつはあんたを裏切ったんだぞあんたを捨てたんだぞ！

男 そうですね。でも、僕が裏切ったわけじゃない、僕が捨てた訳じやない。だから、僕の行動はある意味、一貫してるんです。変な話ですけどね、はは。

迷子 いかれてんのかいかれてんのかれてんのだろ。

男 あなた程じやない。僕は蝶を何羽も殺してきたけど、あなたみたいに自分と同種の人間を殺そうなんて一度も思つたことはない。あ、命を刈り取るつて意味では一緒かも。命に軽重がなければね、はは。

迷子 分かったこうしよう。あんたが手を離せば俺はあの女を追いかけない、救急車だつて呼んでやる、パスワードも思い出したしね。だから離せ！

男 悪いんですけどあなたの信用はほとんどゼロなんで、その言葉は信じられないです、ごめんなさい。

迷子 ふざけんな、こんなところで、俺はまだ、まだまだ、もっともっと殺さないと！

男 冷血漢のあなたをそんなに熱くさせるものってなんなんですか？

迷子 離したら教えてやる。

男 なら別にいいです。

迷子 こ、のお！

迷子、渾身の力を込めて、男から離れる。
しかしナイフは男に刺さつたままだ。

迷子 くつ、おい！

男 アサギマダラって蝶がいるんです。

迷子 ああ？

男 秋になると、南へ、南へ、飛んでいくんです。子供達を残して。

迷子 いかれたのか？ いや、元々いかれてたか。

男 無責任な蝶でしょ？ いや、ほとんどの昆虫はそうなんですけど、子供達を残して自

分だけ、遠い遠い国に飛んでいく、そんな虫は中々いないんじゃないかな？だから僕はアサギマダラを捕まえて標本にする時、ちょっと恨みをこめてピンをさすんです。この野郎、よくも僕らを置いていきやがったな、って。

迷子 分かった分かった、お前は頑張ったよ。だからしまいにしてやる。（男に近づく）

男、ゾシとするような速さで自分からナイフを抜き、迷子に突き刺す。

迷子 え？

男 丁度こんな感じで、はは。

迷子 あ、は、かつて、てめえ。（全身に力が回らない）

迷子、崩れ落ちる。

男 でも、僕は大好きなんです、あんなに残酷な蝶なのに、アゲハ蝶よりもずっと好きなんです。そう、無責任に、こつちの気持ちも考えず、僕らをおいて、さつさと飛んでいく、あの蝶が、はは。

迷子 ちくしょう、いてえいてえ！ 刺されるのってこんなに痛いのかよお。

男 そりや痛いでしようね、僕も凄く痛いですから。

迷子 死ねるか、こんなところで、俺はもつともつと。（ヨロヨロ立ち上がるうとする）

男 駄目ですよ。（もつれるように一人倒れる）

迷子 やめろ、やめろ死にぞこない！

男 それは、あなたもでしょ。

迷子 僕はこんなところじや。

男 大丈夫、僕も一緒にいきますから。

迷子 ああああああ！（大暴れする）

男（それを抑えて） そう飛んでいく、南へ、南へ。彼女もそう、きっと……。

蝶が飛ぶ。夜に飛ぶはずのない、蝶が。

男 あ、蝶だ。

迷子 （暴れながら） いやだいやだ！

蝶が飛んでいる。

男 今度は嘘じやないよ、本当に飛んでる、僕の目の前を、はは。

迷子 （段々力が弱くなる）死にたくない、こんなところで、俺は殺したかったんだ、死にたかったわけじゃない。

男 ほら見て下さいよ、綺麗な綺麗な蝶ですよ。この世の最後に見るには美しすぎるくらいだ。

蝶が飛んでいる。

迷子 死にたくない死にたくない死にたくない、ちくしょう！ ぶつ殺すぞ！ ちくしょう、ちくしょう……。（もはや蝶ほどの力も出ない）

男 （その蝶に手を伸ばし）ああ、やっぱり、綺麗だなあ。

男、こと切れる。

その顔はまるで、夢が叶った幼子のように、やわらかく、温かく、安らかだ。

蝶が飛んでくる。何羽も、何羽も、数えるのも面倒になるほど。

蝶達は、男の亡骸をすっぽりと包み込む。

迷子は、なにものにも包まれることなく、ただ野ざらしに、そこに晒されている。

迷子 （ヨロヨロと立ち上がり、数歩歩く）いやだ、死にたくないよお、ママ、ママ、僕を捨てたママ。あんたを、ころ、す、まで……。（虚空に手を伸ばしたまま、こと切れて倒れる）

パートカーのサイレンが聞こえる。

お巡りさん達が、辺りを騒がしくする。

それでもここは、とても静かだ。

幕。